

分担研究者

成瀬暢也 埼玉県立精神医療センター

研究協力者

平田卓志 山梨大学

松本健二 自治医科大学さいたま医療センター

栗田 晋 雁の巣病院

稲葉宣行 雁の巣病院

田中朋子 埼玉県立精神医療センター

合川勇三 埼玉県立精神医療センター

荻智香子 埼玉県立精神医療センター

平山智恵 埼玉県立精神医療センター

小川嘉恵 埼玉県立精神医療センター

#### A. 研究目的

わが国における物質関連精神障害の治療は、中毒性精神病の治療に終始しており、依存症の治療を実施したり、専門治療機関につないだりすることなく退院となることが多い。本研究は、中毒性精神病で精神科救急システムに入ってきた危険ドラッグ依存症患者を依存症治療システ

ムに導入し、定着させる仕組みやプロトコールを開発することを目的とする。そして、この依

存症治療導入システムの施行前との比較から、「治療継続性」がどのように変化するかを明らかにする。

当センターにおいて、平成 20 年より実施している薬物依存症全般に対する週 1 回 9 ヶ月間の外来集団認知行動療法 LIFE を実施して有効性評価を行っているが、覚せい剤依存症を主体としたものである。危険ドラッグ依存症に対する認知行動療法の独自のモデルを開発

し有効性を証明することを目的とする。

## B. 研究方法

本研究対象は、埼玉県立精神医療センター（以下、当センター）及び雁の巣病院救急病棟に①2013年9月～2014年8月に入院となった危険ドラッグによる中毒性精神病患者の内、②DSM-IV-TRの「物質依存」の診断を満たし、③当センターで開発した短期介入ワークブック LIFE-mini を使った個別プログラムの参加に同意の得られた22例である。対照群は、2012年9月～2013年8月に危険ドラッグによる中毒性精神病で同病棟に入院した「物質依存」患者17例とし、退院後の治療継続率を中心に両群の比較検討を行った。両群ともに入院前からの通院治療継続例は除外した。LIFE-mini は当センターで作成した介入ツールであり、「問題となった薬物について学ぼう」、「依存症という病気について知る」、「あなたに薬物を使わせる引き金」、「再使用を防ぐための方法」、「生活の具体的な計画を立てよう」の全5回で構成されている。介入は、依存症専門医ではなく、救急病棟の主治医が1回10～15分程度個別に、読み合わせなどを通して関わった。

（倫理面への配慮）

上記、有効性評価に関する研究については、埼玉県立精神医療センター・埼玉県立精神保健福祉センター倫理委員会の承認を得ている。承認に際しては、個人情報秘密保持、人権擁護上の配慮、非侵襲性の遵守を守り、被験者からは説明に基づいた同意書をとることを前提として、関連倫理指針に従うことを明示し、体制を整えている。

## C. 研究結果

1. LIFE-mini 介入群22例のプロフィールは、男性17例(77.3%)、平均年齢29.0±9.73歳、無職45.5%、入院形態は医療保護14例(63.6%)、措置・緊急措置8例(36.4%)、平均入院期間は55.3日であった。介入結果として、外来継続については、「退院後の外来受診あり」20例(90.9%)、「1か月後の外来継続」15例(68.2%)、「3か月後の外来継続」15例(68.2%)であった。3か月以上外来継続した例の内、8例(61.1%)が断薬できていた。

2. LIFE-mini 非介入群17例のプロフィールは、男性15例(88.2%)、平均年齢31.1±7.04

歳で、入院形態は医療保護 5 例 (29.4%)、措置・緊急措置 12 例 (70.6%)、平均入院期間は 58.6 日であった。外来継続については、「退院後の外来受診あり」7 例 (41.2%)、「1 か月後の外来継続」5 例 (29.4%)、「3 か月後の外来継続」2 例 (11.8%) であった。3 か月以上外来継続した例の内、1 例 (50.0%) が断薬していた。

以上の結果から、中毒性精神病で精神科救急病棟に非自発的入院となった危険ドラッグ依存症患者の内、LIFE-mini を使って介入を実施した群の方が非介入群より、退院後の治療継続率が 1%水準で有意に高かった。また、3 か月以上の断薬率についても同様の傾向が認められた。ただし、本研究では、介入群は各主治医が必要性及び実行可能性を考慮し、患者に提案して同意を得られた例に対して実施したものであるため、介入群の方が治療継続しやすいことが予想される。としても、依存症治療の経験のない救急病棟担当医によって日常の診療活動の範囲で可能な介入により、治療継続と断薬継続に十分有効性が期待できることを示唆している。今後、さらに有効で効率的な介入ツールの開発と介入法の工夫、危険ドラッグに特化した介入ツールの導入を行い、救急病棟で介入できる治療システムを強化したい。

#### D. 健康危険情報

特記すべき事項は認めない。

#### E. 研究発表

##### 1. 論文発表

- 1) 成瀬暢也：精神科救急の最新知識 II. 症候・精神疾患に対する対応 薬物乱用・依存. 臨床精神医学 43(5):729-735, 2014
- 2) 成瀬暢也：精神科臨床からみた危険ドラッグ乱用の現状と課題. 公衆衛生 79(4):228-232, 2015
- 3) 成瀬暢也：違法薬物と法的問題—危険ドラッグ—. 精神科 26(4):257-262, 2015 精神科臨床からみた危険ドラッグ乱用の現状と課題. 公衆衛生 79(4):228-232, 2015
- 4) 症候・精神疾患に対する対応 薬物乱用・依存. 臨床精神医学 45(5):729-735, 2014
- 5) 医薬品依存患者の治療方法. 月刊薬事 56(10):59-63, 2014

## 2. 学会発表

- 1) 成瀬暢也：「薬物依存症専門外来における脱法ドラッグ使用障害患者の臨床的特徴と治療」  
第 10 回日本司法精神医学会（5/16-17, 那覇）
- 2) 成瀬暢也：「埼玉県立精神医療センター依存症専門病棟における脱法ドラッグ使用障害入院患者の推移」第 10 回日本司法精神医学会（5/16-17, 那覇）
- 3) 成瀬暢也：「薬物依存症外来からみた脱法ドラッグ患者の臨床的特徴と問題点」平成 25 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会（10/3-5, 岡山）
- 4) 成瀬暢也：「当事者中心の薬物依存症治療～『ようこそ外来』と『ごほうび療法』の提案～」  
第 110 回日本精神神経学会（6/26-28, 横浜）
- 5) 成瀬暢也：「脱法ドラッグ使用障害患者の臨床的特徴と治療～薬物依存症専門外来からの報告～」第 110 回日本精神神経学会（6/26-28, 横浜）
- 6) 成瀬暢也：「精神科救急病棟における薬物依存症治療の標準化に向けて～治療パッケージの導入～」第 110 回日本精神神経学会（6/26-28, 横浜）
- 7) 成瀬暢也：シンポジウム：楽しくできる「ごほうび療法」とモチベーション強化グッズの活用～薬物依存に対する随伴性マネジメントと補助介入ツールの実際～第 110 回日本精神神経学会（6/26-28, 横浜）
- 8) 成瀬暢也：精神科救急病棟における薬物依存症治療の標準化に向けて～治療パッケージ導入の提案～精神科救急学会（9/5-6：旭川）
- 9) 成瀬暢也：精神科救急病棟における当事者中心の薬物依存症治療の推進へ～「ようこそ外来」と「ごほうび療法」の実践からの報告（9/5-6：旭川）
- 10) 成瀬暢也：脱法ドラッグ使用障害患者の臨床的特徴と治療～薬物依存症専門外来での自験 105 例からの考察～第 36 回日本アルコール関連問題学会（10/3-4：横浜）

- 11) 成瀬暢也：会長講演：当事者中心の依存症治療・回復支援 第36回日本アルコール関連問題学会（10/3-4：横浜）
- 12) 成瀬暢也：現在の脱法ドラッグ使用障害患者の臨床的特徴～薬物依存症専門外来での自験105例からの考察～第36回日本アルコール関連問題学会（10/3-4：横浜）
- 13) 成瀬暢也：脱法ドラッグ使用障害患者の治療～脱法ドラッグ患者をいかに治療するか～第36回日本アルコール関連問題学会（10/3-4：横浜）
- 14) 成瀬暢也：当事者中心の依存症治療：薬物依存症治療において治療者が留意しておきたい基本的なこと第36回日本アルコール関連問題学会（10/3-4：横浜）
- 15) 成瀬暢也：精神科救急病棟における薬物依存症治療を容易にする治療パッケージの提案～LIFE BOXについて～第36回日本アルコール関連問題学会（10/3-4：横浜）
- 16) 成瀬暢也：依存症治療における解毒入院を成功させるコツ～薬物渴望期の理解と対応～第36回日本アルコール関連問題学会（10/3-4：横浜）
- 17) 成瀬暢也：当事者中心の薬物依存症治療～「ようこそ外来」と「ごほうび療法」の提案～第36回日本アルコール関連問題学会（10/3-4：横浜）
- 18) 成瀬暢也, 小川嘉恵：埼玉県立精神医療センター外来薬物依存症プログラム「LIFE」の実践にみる治療継続の重要性について 第36回日本アルコール関連問題学会（10/3-4：横浜）
- 19) 平田卓志, 松本健二, 田中朋子ほか：埼玉県立精神医療センター救急病棟における脱法ドラッグ使用障害患者の特徴について 第36回日本アルコール関連問題学会（10/3-4：横浜）
- 20) 平山智恵, 平田卓志, 荻智香子, 成瀬暢也ほか：脱法ドラッグの使用後に横紋筋融解症が出現した4例について 第36回日本アルコール関連問題学会（10/3-4：横浜）
- 21) 荻智香子, 田中朋子, 合川勇三, 成瀬暢也ほか：埼玉県立精神医療センターにおける物質使用障害患者の変化について 第36回日本アルコール関連問題学会（10/3-4：横浜）

#### F. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得：なし
2. 実用新案登録：なし
3. その他：なし

